

1. 子どもの調査結果（第5章）の考察 ～ 「札幌の子ども像」 ～

（1）自分のことが好きか

今回、子どもの調査では、「自分のことが好きですか」という質問をしています。その結果、小学生は28.8%が「好き」、「どちらともいえない」が60.1%、「嫌い」が10.0%でした。一方、中学生以上では、17.1%が「好き」、「どちらともいえない」が63.6%、「嫌い」が19.0%です。

一般に、自分のことが好きなのは、プライドや自信の表れとみることができます。言い換えると、周囲の人々との関わりが良ければ、自分に対しても肯定的になれるのです。子どもの自我の発達を加味すると、単純に比較することはできませんが、この結果からは、自己肯定感の強いのは、中学生以上よりも、小学生であることがわかります。

しかし、小学生で自分のことが嫌いと答えた子どもが10.0%、中学生以上では19.0%に達します。こうしたことから、子どもたちは、小学生の時期からストレス状態に置かれており、この傾向は中学入学以降、一層強まっているのではないかと考えられます。

この状況を緩和するには、子どもを育むにふさわしい環境を大人が用意しなくてはなりません。その第一歩はどのような立場の大人であっても、子どもを信頼することではないでしょうか。

(本編 34 ページ参照)

（2）落ち着く（ほっとする）場所、好きな場所

また、楽しくほっとする時

子どもたちにとって、本当に落ち着くのは自分の部屋のように。「落ち着く場所、好きな場所」は、「自分の部屋」が最も多く、小学生が47.0%、中学生以上では68.8%の子どもが回答しています。

しかし一方で、子どもたちが楽しく、ほっとする時は、「自宅にいるとき」と並んで「友達と過ごすとき」が小学生で76.9%、中学生以上では82.6%となっています。今の子どもは、人と関わることが苦手と言われますが、やはり、子どもたちが抱えるストレスは、こうした子ども同士のコミュニケーションの場でその大半が解消されているのではないのでしょうか。

(本編 34～37 ページ参照)

（3）本当は「やりたいこと」と思っているのに、できないこと

また、「やりたい」と思っているのに、できない理由

やりたいことがあってもできないと答えたのは、小学生で63.0%、中学生以上で52.9%となっています。今回の調査では、やりたいことについて具体的に聞いていませんが、できない理由で最も多いのは、小学生が「親にダメといわれているから」、中学生以上では「お金がないから」となっています。しかし、小学生、中学生以上に共通しているのは、「時間がないから」ということです。子どもたちの多忙さの一端をうかがうことができます。

(本編 38 ページ参照)

（4）大切だと思うこと

子どもが「大切だと思うこと」は、小学生では57.5%が「勉強すること」をあげています。

次いで「友達がいること」が53.9%で、以下「遊ぶこと」「大人のいうことを聞くこと」「夢があること」の順です。中学生以上では、「友達がいること」が70.6%、「遊ぶこと」と「夢があること」が50%を超えます。以下、「勉強すること」、「時間がたくさんあること」と続きます。

「楽しく、ほっとする時」や「困っているときに相談する人」の質問とも関連しますが、子どもにとって、友だちとの人間関係の構築はきわめて重要であり、それゆえに、子どもたちの悩みやストレスの大きな要因ともなり得るといえるのではないのでしょうか。

(本編 36,37,39,42 ページ参照)

(5) 大人にしてもらいたいこと

大人にしてもらいたいことについては、小学生、中学生以上ともに「自分のことは自分で決めさせてほしい」(小学生 33.3%、中学生以上 42.2%)が上位にあがっています。大人にはこうした子どもの意思表示を、正面から受け止める責任があるのではないのでしょうか。その他、小学生からは、「約束を守る」、「もっと話を聞いてほしい」、「友達や兄弟と比べない」、中学生以上では、「友達や兄弟と比べない」、「決まりや約束を押しつけない」等が挙げられており、家庭あるいは学校等における、子どもと大人のコミュニケーションのあり方を考えさせられる結果となっています。

(本編 40 ページ参照)

(6) 今、悩んでいること

子どもたちが今、悩んでいることは、小学生は、「普段の勉強」、「お金のこと」、「友達のこと」となっています。中学生以上になると、「受験や進路」の悩みが最も多く、次いで「普段の勉強」、「将来のこと」となっています。子どもは、成長とともに「自己実現」にかかわる課題を強く意識するようになるといえます。

(本編 41 ページ参照)

(7) 困っているときに相談する人

困っているときに相談する人は、小学生では、「親」、「学校の友達」、「学校の先生」の順となっていますが、中学生以上になると、順位が入れ替わり、「学校の友達」、「親」、「学校以外の友達」となります。しかし、ここで問題なのは、相談相手のいない子どもが、小学生で5.8%、中学生では11.7%いるという現実です。誰にも相談できずに一人で悩みを抱えている子どもたちに対する、救済の仕組みづくりが望まれます。

(本編 42 ページ参照)

(8) 現在感じている子どもの姿(自分の姿)

多数の質問の中で、注目すべき点は、小学生、中学生ともに、「たくさん遊びたい」と回答した子どもが最も多かったことです。学校の勉強だけでなく、塾や習い事に忙しい現代の子どもたちの気持が端的に表れているといえます。

しかし、「夢や目標を持っている」については、小学生と中学生以上とでは大きな違いが見られます。中学生以上になると、半数の子どもが「夢があること」が大切だと思うと答えているものの、「子どもは夢や目標をもっている」と回答する子どもが非常に少なくなります。現実吟味が進み発達したともいえますが、将来像が描きにくい時代に育つ今の子どもたちの、一面ともいえるのではないのでしょうか。

なお、この質問については、小学生に対する質問の中では「自分の姿」に限定して聞いています。この年齢段階の子どもは、自分を含めた子ども全体に対する認識を十分に持っていないと考え、答えやすい聞き方を採用しています。

(本編 43～44 ページ参照)

2. 大人の調査結果(第3章)の考察 ～ 札幌の大人の「子ども観」 ～

(1) 子どもにとって一番大切だと思うこと

子どもにとって大切なことについて、大人は、「愛されて育つこと」、「健康であること」、「将来の夢があること」、「友達がいること」、「個性が尊重されること」と答えています。「勉強すること」と答えた大人の割合は、この質問の選択肢の中で低くなっています。本音と建前の問題もあると思いますが、多くの大人の率直な気持ちであると言えるでしょう。これらは、子どもが育つ条件として必要なものです。これら一つひとつを支援する大人の役割も大切です。

(本編 20 ページ参照)

(2) 子どもにしてあげたいこと

子どもにしてあげたいことについてみると、「もっと話を聞いてあげること」、「家族で過ごす時間を確保する」、「子どもを守る」、「自分のことは自分で決めさせる」の順です。

核家族化と女性の社会進出の進展にともなって、保護者と子どもと一緒に居る時間、家族の対話の時間が減っているのではないのでしょうか。これらの回答は、大人が普段子どもに十分にあげることが出来ていない事柄と認識している、と読み換えることもできると思います。

(本編 21 ページ参照)

(3) 子どもたちに欠けていると思われる環境

子どもたちに欠けていると思われる環境として指摘しているものは、「豊かな自然の中で活動させる機会を増やす」が最も多く、半数以上の方が回答しています。次いで、「子どもの遊び場がたくさんある」、「学校の勉強以外のことにも打ち込める」の順です。大都市となった札幌には、身近に自然が少なくなっていると感じている大人が多いのではないのでしょうか。

(本編 22 ページ参照)

3. まとめ

今回のアンケート調査から「札幌の子どもたち」の特徴の一端を見出すことが出来ました。回答結果には、過度に競争的な社会、人間関係の希薄さ、コミュニケーションや対話の不十分さ、幼児期の過ごし方や体験の質、遊びの不足といった、子どもたちを取り巻く社会環境が、大きく影響していると考えられるものもあります。今後、札幌において子どもたちにやさしいまちづくりをクローズアップしていかなければならないでしょう。

最後に、「子どもの権利条約づくり」の認知度については、小学生では73.9%、中学生以上でも65.2%の子どもが知らないと回答していました(平成17年9月時点)。

「子どもの権利条約」制定プロセスにおいて、条約づくりの取組の広報と、子どもの権利の普及に一層の工夫をしていくことが必要です。